

「月岡芳年—血と妖艶」展

太田記念美術館（東京・原宿） 2020.09.04～10.04 後期展示



「太田記念美術館」は、東京・渋谷区・神宮前にある浮世絵を専門とする美術館で、「葛飾北斎」「歌川広重」「歌川国芳」を中心とした人気絵師の代表作をはじめ、浮世絵の歴史を網羅するコレクションは「およそ14万点」にのぼる。ルーツは実業家「太田清蔵」の収集した「およそ1万2000点」の浮世絵をもとに、1977年銀座で仮開館し80年1月現在地に移転・開館したもので、所蔵する作品の数は、肉筆画「約600点」、版画「約1万点」に旧鴻地コレクションの肉筆扇「約900点」を収蔵していて、常時「80～100点」が展示されている。

月岡芳年《英名二十八衆句 因果小僧六之助》

浮世絵木版画 左上ポスター

月岡芳年《月百姿 はかなしや波の下にも入ぬへし つきの都の人やみるとて有子》 1886（明治16）年 浮世絵



画伯の「月百姿シリーズ」は、晩年に描かれた作品で、いずれも「月」を主題としている。

作品は、平安時代の切ない悲しい恋の話の浮世絵であるが、実定が都に戻る際「有子」は別れがたく、他の内侍とともに都までついていったが、身分の低い「有子」は実定に合うことがどうしてもできない。

その後も思いを抱き続けるが、願は叶わないことに絶望を覚え、「有子」は自ら命を絶つことを決意する。

せめて実定の近くで死のうと、都の近くの海で船にのる「有子」であるが、慰めに琵琶を弾いていたが、悲しみで涙が止まらず演奏が続かない。

そして、「有子」が最期に詠んだ和歌は、「はかなしや波の下にも入ぬべし つきの人や見るとて」（はかないことです。私は波の下へと参ります。月の都にいるあの人が、私のことを見ているかと思って。）波に反射する月の光がより切なさを際立たせているが、これは単に美しい月の光ではなく、月の都、愛しくてたまらない実定の住む都の世界が重ねられている。